

◇◆国際アーサー王学会日本支部◆◇

○●2007年度年次大会報告●○

日本支部の2007年度年次大会は、下記のとおり滞りなく開催されました。

[日時] 2007年12月16日(土)

[会場] 中央大学八王子キャンパス

＜年次大会プログラム＞

- I. 研究発表 [13:05～14:35]
- 「誓約と偽証：マロリーにおける performative language」
リーズ大学大学院修了 小宮真樹子(英文)
(司会) 関東学院大学教授 多ヶ谷有子
 - 「Stockholm46のIvens saga」
早稲田大学大学院 林 邦彦(独文・北欧文)
(司会) 杏林大学准教授 伊藤 壺
 - 「マーリンの姿—悪魔の遺伝子と変身」
サセックス大学大学院 田中ちよ子(英文)
(司会) 成城大学名誉教授 池上忠弘
- II. シンポジウム[14:50～16:50]
- 「ガウェイン礼賛」(コーディネータ小路邦子)
渡邊徳明(独文) *Diu Crone* 『王冠』(13C前)
渡邊浩司(仏文) *L'Atre périlleux* 『危険な墓地』
(13C半)
高橋 勇(英文) *Sir Gawain and the Green Knight*
『ガウェイン卿と緑の騎士』(1400頃)
- III. 総会 [17:00～17:40]
(司会) 会長 原野 昇
- III. 懇親会 [18:00～19:30]
場所：中央大学生協食堂

大会運営当日は、中央大学の学生さんが2名、受付・お茶出しの手伝いをしてくれました。大会終了後に懇親会も予想以上の参加者が集い、和気あいあ

いとした雰囲気でも盛り上がりました。今回は特に、開催校の福井千春先生と渡邊浩司先生に多岐にわたりお世話になりました。心から御礼申し上げます。(事務局)

＜総会での報告・協議事項等＞

〔報告事項〕

- 活動報告
2006年度年次大会、ニューズレター20号発行、Bulletin 発送が滞りなく行なわれた。
- 決算報告
2007年度の会計報告が行なわれ、2008年度予算案が承認された。本部への Bulletin 代は以下のとおり遅延なく収められた。
\$20(冊)×94(人分)(*\$1=¥117.10)
*2007年登録会員数86名
- 退会者
中島悠爾氏
- 寄付金および賛助会員協力者を今回のニューズレターで2年分報告する。

〔協議事項〕(すべて承認)

- 新入会員
福本直之氏(仏文/創価大学)
(推薦：原野昇、不破友理)
ひかわ玲子氏(作家)
(推薦：高宮利行、高木眞佐子)
木村正俊氏(英文/神奈川外語短期大学)
(推薦：渡邊浩司、高木眞佐子)
- 2008年度の大会開催校：白百合女子大学
- 2008年役員改選に向けて選挙管理委員会を発足したい。委員は多ヶ谷有子氏、西川正二氏、横山安由美氏。

4. 人気満了に伴う新会長選出の日程・手順
 - (1) 郵送による第一次投票を経て、
2008年9月27日(土)会長候補者を決定する。
 - (2) 郵送による第二次投票を経て、
2008年11月1日(土)に新会長を決定する。
 - (3) 任期は改選後の2009年1月1日より3年間(日本支部規約第7条2項による)。

4. 国際大会について

- (1) 日本人会員の参加が困難な日時が設定されている現状を2008年レンヌ大会で報告する
- (2) Banquetへ参加する発表学生への費用補助
 - ① 有資格者は大学院在籍者かつ当該国際大会で発表する者とする
 - ② 本人が申請用紙にて申請しなければならない。
 - ③ 支払いは帰国後、円換算して行う。

〔会員へのお願い・他〕

- a. Bulletinに掲載される住所変更登録は毎年4月末が〆切ですが、掲載は一年遅れです。時間がかかるということをご承知の上、変更があった場合には速やかに事務局に届け出てください。
- b. 会費について1: 運営資金が潤沢とはいえないので、会費の早めかつ積極的なお支払いをお願いします。また、寄附寄付も積極的に受け付けています。
- c. 会費について2: 今は賛助会員制度から寄附金制度への移行期です(2009年度請求時より賛助枠廃止予定)。皆様の温かいご支援をお願いいたします。(事務局)

〈2006年度大会 要旨〉

I. 個人研究発表

「誓約と偽証 マロリーにおける performative language」 小宮真樹子

「ペンテコストの誓い」はマロリーにより追加された重要なセクションの一つである。しかし、

騎士道の理想として注目されることは多くとも、発話行為としての側面を論じた研究は少ない。本発表は哲学者 J. L. Austin により定義された performative language の観点から、「ペンテコストの誓い」がアーサーの社会においてどのような役割を果たしているかを分析した。

円卓の騎士たちは毎年、聖霊降臨の祝日に宮廷へ集い、同じ誓いを口にすることでひとつの集団としての結束を保っていた。そして、「何のために戦うのか、どのように振舞うのか」という誓約は、騎士たちを共通の理想で結びつけると同時に、社会における円卓の騎士たちの役割を定義し、かつ認知させる機能も備えていた。

けれども、王妃との関係を隠すため、ランスロットが詭弁のような発言を繰り返すにつれて、言質への信憑性が薄れていった。結果、「ことば=行為」という図式が崩れ、「誓う」「約束する」といった行動はその効力を失ってしまったのである。発言は performative language において最も重要な要素ではあるが、ただ立派に聞こえる言葉を発するだけでは誓約行為は成立しない。その発言を事実、真摯なものとして受容する聴衆の存在を前提としているからである。

誓いがうわべだけの偽証となり、嘘と暴力が蔓延したためにアーサーの円卓は崩壊していったのではないだろうか。

「Stockholm46 の Ivens saga」 林 邦彦

Ívens saga と呼ばれている作品は、Chrétien de Troyes の *Yvain* がノルウェー語を経て、さらにアイスランド語へと翻案されたものと考えられている。この *Ívens saga* は、15世紀のものと考えられる二つの皮写本と、17世紀以降のものと考えられる複数の紙写本によって伝えられているが、この紙写本のうち、17世紀後半のものと考えられる Stockholm46 写本のは、他のものに比べて分量が少なく、内容的改変も多い。また、皮写本版

における写本の欠落部分の前後がそのままつながれている箇所があり、作品の整合性を乱す結果となっている。しかし、Stockholm46 版に見られる削除・改変は決して恣意的なものではなく、一定の方向性を示している。皮写本と比べた際に見られる削除箇所は複文や、人物の感情描写も多いが、冗長と思われる箇所、重複している描写も削除対象となっている。人物描写については、Stockholm46 では、作品全体を通じて Íven が成長する、ないしは、作品にはっきりとした二部構成を持たせ、第一部での Íven の行動原理がその最後で破綻し、第二部ではそれを乗り越える形の騎士としてのあり方が展開される、という性格は弱められ、第一部における Íven の非は極力弱められ、当初から理想性をもった人物として描かれている。そして、他の登場人物の言動についても、非理性的でよい印象を与えない、あるいは不自然だと思われるであろう箇所は削除・改変の対象となっている。

「マーリンの姿の変容—悪魔の息子から老賢者へ」 田中 ちよ子

Wise old man (老賢者) は、今現在多くの人々がイメージするマーリンの姿であろう。しかし、いつの時代もマーリンが当然のように年老いた姿で描かれてきたのではなかった。非常に知恵のある人物という設定は、マーリンというキャラクターの本質であるが、その並外れた知識や能力の拠り所は時代とともに変化し、これがマーリンの容姿にも影響を与えているようだ。

中世時代、マーリンの母は処女、父は悪魔、あるいは悪魔と言われた。この人ならぬ誕生により、マーリンは生まれつき人間の領域をはるかに超えた力を備え、思いのままに姿を変えることも出来る shape-shifter だった。中世写本の装飾画に描かれたマーリンは、本来の姿として悪魔の遺伝子を暗示させる奇怪な姿のほか、少年、若者、壮年、

老人とさまざまな姿・年齢層で描かれており、その姿には一定のイメージがなかったようである。むしろ、イメージを固定しにくいところが、魔法使いマーリンの神秘性をさらに深めていると言える。

しかし、ルネサンス期に入り、悪魔の息子説に懐疑的な雰囲気が強まると、マーリンの魔法、変身は減少・削除され、その姿は老人として描かれることが多くなっている。この姿は、悪魔からの遺伝ではなく、学習と経験を積むことで賢者の域に達し、その長い時の経過の中で肉体は衰えるという、より人間的なマーリンが表現されているのだろう。

II. シンポジウム 「ガウェイン礼賛」

話は2006年の大会終了時まで遡る。2006年度のシンポジウム「ガウェイン裁判」では、各地域でのガウェイン像の異なりが見事に浮き彫りにされてしまったがゆえに、ひとつの見解へのまとまり—つまり判決—が時間切れとなってしまった。そこで、2007年度には引き続き「ガウェイン裁判」のシンポジウムを行なおう、と事務局とパネリストは当時申し合わせたものだった。

その後、パネリストたちは協議を重ねてくださったが、ガウェインについてまとまった見解をひとつ提出するのはとても無理そうだ、という前例が示されてしまったこともあり、裁判形式は結局見送られることとなった。しかし、2006年の裁判でガウェインに向けられた攻撃はあまりに一方的だったのではないかとする一部の熱心な愛好家の要望もあって、「ガウェイン礼賛」として新たなシンポジウムが企画されるにいたったのである。

前回扱われなかったため不満が高かった、格調高い英文作品『ガウェイン卿と緑の騎士』を高橋勇氏が扱うことは引き受けてくださったが、それに加えてどの作品を選ぶかということが最大の難問であった。しかし幸いにも、仏文から渡邊浩司

氏が『危険な墓地』を、独文から渡邊徳明氏が『王冠』を提示してくださり、大陸にも favorable なガウェイン像が存在したことを示す貴重な証左が出揃ったのである。そして前回と同じく小路邦子氏が、コーディネータとしてガウェイン像の変遷をまとめてくださることになった。

ガウェイン、ゴーヴァン、もしくはガーヴェインを似通った切り口から浮き彫りにしようとすることで、アーサー王の円卓の騎士の中でも特に彼の騎士像が揺れ動いたことと、それにまつわるそれぞれの地域の事情が、かえってはっきりと示される結果となったことが、今回のシンポジウムの最大の成果といえるだろう。渡邊浩司氏は『危険な墓地』においてはゴーヴァンの「分断された己のアイデンティティーが統合へと向かうプロセス」が、その複雑な筋書きと重なり合っていると、渡邊徳明氏は『王冠』において「屈託無い様子で瞬間々々を運に任せて生き、なんら屈折を味わうことなく現世の連続面上に聖杯の世界を見出すことのできたガーヴェイン」がパルツィファルは失敗した聖杯の探求に成功する理由を新しい時代の主人公像に見て取った。そして高橋勇氏は『ガウェイン卿と緑の騎士』において「14世紀後半以降のイギリスで、ガウェインを礼節の騎士として創りあげる必然性」にも言及するものの、ガウェイン・ロマンス/バラッドは英国のみの作品ではなく「中世末期の西ヨーロッパ文化を根とする再話」と捉える必要性を強調した。コーディネータの小路邦子氏は、シンポジウムではガウェイン像の変遷のまとめを簡単にしてくださった。The Round Table 投稿にあたってさらに詳しくガウェイン像を初期、中期、後期に分け、中期に特にフランスで貶められたガウェイン像が後にオランダやドイツで回復すること、後期のブリテン島ではマロリーを例外としておおむね肯定的なガウェイン像が回復している様子を概括してくださった。こうして前年とは比べ物にならない「礼賛」を受けたガ

ウェインであった。最後に前年から持ち越しになっていた裁判の評決を採り、言うまでもなくガウェインは無事に無罪放免となった。

なお、今回のこのシンポジウムのパネリストをつとめられた4人は慶應義塾大学高宮研究会編の*The Round Table*第22号に「特集」として稿を寄せてくださった。ご興味がおありの会員の皆様はぜひこの雑誌をご覧ください。(事務局)

The Round Table (慶應義塾大学高宮研究会編), 22 (2008)

小路邦子「ガウェイン—その毀誉褒貶」 pp. 85-95.

渡邊浩司「フランス中世盛期の「ゴーヴァン礼賛」——『危険な墓地』をめぐる」 pp. 96-109.

渡邊徳明「ハインリヒ・フォン・テム・テュールリン(Heinrich von dem Türlin)の『王冠』(Diu Crône)について」 pp. 110-124

高橋勇「「礼節の騎士」の誕生——再話としての英国ガウェイン・ロマンス」 pp. 125-138.

▲▼ 第22回国際アーサー王学会 ▼▲

▲▼ —レンヌ大会— 報告 ▼▲

日本支部会長 原野 昇

3年に1回開催される国際アーサー王学会の第22回大会がフランスのブルターニュ地方の首邑レンヌ市で2008年7月15-20日に開催された。主催はレンヌ第2大学のChristine Ferlampin-Acher 国際アーサー王学会副会長を中心に、Denis Hüe, Anne Delamaire という2人の強力な協力者、それに10人の学生スタッフがこれにあたった。

会場のレンヌ第2大学キャンパスは地下鉄の駅を降りると目の前にあり、宿泊は参加者全員、寮や学生宿舎ではなく各自で予約した市内のホ

テルだったが、市内中心部から大学までは、ほぼ 10 分おきに運行している地下鉄で 10 分ほどであるので、アクセスは非常に便利であった。昼食は研究発表会場の隣の大学内食堂で、大方の日本人には多過ぎるくらいボリュームたっぷりの豪華なものであった。ワインも好きなだけ飲めたが、午後のセッションのことを考えて、少しの量しか飲まない人も多いようであった。

ブルターニュ地方はアーサー王関係の多くの作品の舞台となっているだけに、国際アーサー王学会とも関係が深い。たとえば、同学会が正式に発足したのは、1948 年にブルターニュ地方のカンペールで開催された第 2 回大会においてであった。以来、ブルターニュ地方のヴァンヌ（1960 年、第 6 回）、ナント（1972 年、第 10 回）でも開催され、レンヌでは 1954 年の第 4 回大会、1984 年の第 14 回大会に次いで 24 年ぶり、3 回目の開催であった。またレンヌ大学は、国際学会創設時のメンバーで、1981 年から 1983 年まで会長を務めた Charles Foulon 氏が長く教鞭をとった大学である。

そのような地理的、歴史的状況から、特に今年には学会創設 60 周年の記念すべき年でもあり、今大会を取り巻く熱気にはただならぬものがあった。そのなかでも特筆すべきは、大会に合わせて企画された「変転するアーサー王伝説 *Le roi Arthur, une légende en devenir*」と題する展覧会である。この展覧会は市内の近代的な展示会場シャン・リーブルで開催され、期間は 2008 年 7 月 15 日から 2009 年 1 月 4 日までと半年近くあり、フランス国内外からの来観者を期待している。レンヌ市、ブルターニュ地方だけでなく、フランス国立図書館、博物館も全面的に協力した大規模なものである。写本や刊本を集めた部屋には、アーサー王物語関係最古の写本の一つである、首府レンヌ図書館 (*La Bibliothèque de Rennes Métropole*) 所蔵の 255 番写本をはじ

め、パリやフランス各地の図書館のみでなく、イタリア、イギリスなど外国の図書館からも写本を借りてきて展示していた。大会初日に合わせて 7 月 15 日 20 時から開催された展覧会のオープニングセレモニーは 500 名を超す招待者で溢れかえった。

学会参加者は約 250 名、同伴者その他を加えると約 300 名であり、2005 年にオランダのユトレヒトで開催された前回第 21 回大会より少し多かった。発表は 5 日間で約 170 編あった。4 編の全体講演とデジタル化計画紹介の 1 編を除く分科会の発表は質疑応答を含め 1 人 30 分で、いつものように 3~5 の分科会の同時並行開催であった。日本人参加者は、イギリスで活躍中の 2 人を含め 13 人（同伴者は除く）であり、そのうち、井上富江、加藤誉子、河崎征俊、佐佐木茂美、高木眞佐子、高橋勇、田中ちよ子、不破有理（敬称略。発表題目は本文末尾参照）の 8 名が（うち 2 名は複数の）研究発表を行った。そのほか、佐佐木、高木、不破、原野が分科会の司会を担当した。

4 編の全体講演はそれぞれ 1 時間で、今大会の 4 つの中心テーマに合わせて行われた。すなわち、1. *The Changing Arthurian Canon*, 2. *Compiling the Arthurian Book*, 3. *Historical Contextualization of Arthurian Texts*, 4. *Comparative Arthurian Literature* である。特に印象に残ったのは、モントリオール大学の Francis Gingras 氏が第 2 のテーマに沿って *Le livre arthurien et la matière du roman* と題して行った講演であった。種々異なるジャンルの作品が同一写本の中に収録されて一冊となっているものは多いが、氏はその点に着目して *roman* の問題を見直そうとしたものであった。この種の研究は今後ますます盛んになっていくであろう。

初日には全体講演の一環として、国際アーサー王学会の書誌 *Bulletin Bibliographique de la*

Société Internationale Arthurienne (BBSIA) のバックナンバーのデジタル化がプロジェクトに写しながら紹介された。Denis Hüe 氏を中心とするレンヌ大学のチームが取り組んでいるもので、BBSIA の第 1 巻からデジタル化され、レンヌ大学のサイトに公開されている。著者名、キーワードなどによる種々の検索が可能である。また、レンヌ 255 番写本の各ページ、刊本などもデジタル化され公開されている。

18 日（金）には国際委員会が開催された。国際委員会は本部役員（会長、副会長、庶務、書誌、会計）と各支部の会長とからなる。支部数は、前年の郵送による国際委員会で承認された「オーストラリア・ニュージーランド支部」が新たに加わり 12 となった。委員会には、欠席のスイスとベルギーの代表を除く 10 支部の代表が出席した。日本からは会長のほか不破副会長と高木庶務担当幹事がオブザーバーとして参加した。席上では翌日の総会での議題が確認・調整された。次々回の第 24 回大会（2014 年）の開催地の候補として、北米（カナダ・アメリカ）支部が可能性を検討してもよいというような発言をしたが、聞き置かれる程度であった。

大会最終日の 19 日（土）には総会が開かれた。冒頭で、2005 年の前回大会以降に亡くなった会員の名前が読み上げられ、黙祷が捧げられた。そのなかでは、日本支部から報告した青山吉信氏の名前も読み上げられた。物故者のなかでも、2007 年 1 月 31 日に 102 歳で亡くなった Alexandre Micha 氏と、2005 年のユトレヒト大会で副会長に選ばれた直後の同年 8 月 7 日に 65 歳で亡くなった Emmanuèle Baumgartner 氏に対しては、2 人の学界に対する多大な貢献に特別の讃辞が捧げられた。次いで次期役員、次回大会開催地、同中心テーマなどが決定された。Peter Field 現会長の後任として、現副会長の Christine Ferlampin-Acher レンヌ第 2 大学教授、

副会長に Keith Busby ウィシコンシン大学教授がいずれも無投票で選出された。その他の役員は、庶務 Maria Colombo Timelli（ミラノ大学）、会計 Joan Grimbert（アメリカ・カトリック大学）、書誌 Frank Brandsma（ユトレヒト大学）の留任が承認された。なお、Brandsma 氏は 2011 年限りでの引退を表明されている。

次回第 23 回大会はイギリスのブリストルで 2011 年 7 月 25—30 日に開催されることが決まった。日本の大学の学年暦の事情を考慮してもらうように発言しようと思っていたが、第 23 回大会は既定の事実のごとくに準備が進んでいるようであり、以後も開催国の学年暦が優先されるので、日程に関する日本人会員の希望はなかなかかなえられそうにない。たとえば今大会に関して主催者に聞くと、7 月 20 日以降は夏休みに入って、食堂をはじめ大学のほとんどの機能が麻痺するため、学会開催などはまったく不可能とのことであった。

最終日の翌日の 20 日（日）には、1. Fougère / Mont Saint Michel, 2. Avranches / Coutances / Hmby, 3. Brocéliande / Josselin という、行き先の異なる 3 つのエクスカッションが用意され、それぞれの希望に応じて参加した。

大会期間中には、前記の大々的な展覧会とは別に、レンヌ第 2 大学図書館でも、小規模ながら、アーサー王伝説関連の特別展示会が開催されていた。そのほか大会参加者用に、ガイド付きレンヌ旧市街見学（16 日）、音楽会（16 日）、映画会（19 日）が開催され、さらに市庁舎での歓迎レセプション（17 日）と市内のレストランを借り切ったバンケット（18 日）が催された。このバンケットで日本支部が集めたカンパ金、他支部のものと同様、大会実行を支えた学生たちに手渡された。カンパを寄せられた参加者に感謝いたします。

3 年近くにわたる準備期間も含め今大会は

Ferlampin-Acher, Hüe, Delamaire の 3 人と 10 人の学生スタッフが一丸となって運営に当たり、大会は大成功であった。レンヌ大学のみなさんに感謝と敬意を表したい。と同時に、日本支部の会員も、現在はお客として参加するのみであるが、300 人規模の国際大会を日本支部が主催しなければならぬと仮定したらどれほどの量の仕事をこなさないといけないかを常に想像しつつ参加する必要があるということを痛感した。

★BBSA ほかのデジタル化のアドレスは以下のとおり。

<http://bbsia.cetm-celam.uhb.fr>

★2008 年、第 22 回 Rennes 大会における日本人会員の発表題目 (50 音順)

井上 富江, Etude comparative des images médiévales de l'au-delà entre le Japon et la France

加藤 誉子, (1) Digital edition of Malory's 'Roman War'

(2) Two versions of the 'Roman War' Episode
河崎 征俊, 'For shame!' (SGGK, 1530): 'name' and 'shame' in *Sir Gawain* and Chaucer's *Troilus*

佐佐木 茂美, "Glatissements" de la bête et son "chaceor" dans *le Roman de Tristan en prose*

高木 眞佐子, (1) Caxton's chapter divisions and table of contents in the *Chronicles of England*

(2) Caxton's *Chronicles of England*, Roman campaign section

高橋 勇, Merlin the Rhymer: Walter Scott and John F. M. Dovaston

田中 ちよ子, The Humanization of Merlin in Richard Hovey's *Lancelot and Guenevere. A Poem in Dramas* (1891)

不破 有理, *The Awntyrs off Arthure* in the context of the Thornton

★次回第 23 回 Bristol 大会 (2011 年) における中心テーマ

1. Arthurian ideals and identities

Identités et idéaux arthuriens

Arthurische Ideale und Identitäten

2. Late Arthurian romance

Le roman arthurien tardif

Spätmittelalterliche Artusromane

3. Writing techniques and style

Techniques d'écriture et stylistique

Stylistik

4. Arthurian manuscripts and editions

Manuscrits et éditions de romans arthuriens

Arthurische Handschriften und Editionen

5. Arthurian images and iconography

Images et iconographies arthuriennes

Arturische Ikonographie und Abbildungen

6. The supernatural and spirituality in Arthuriana

Surnaturel et spiritualité dans la littérature arthurienne

Das Übernatürliche und Spirituelle in der Artusliteratur

(Gingras 教授が総会で準備したスライドによる。表現の仕方の詳細は修正される可能性がある。たとえば 4 の "romans arthuriens" は "œuvre arthurienne" などのように。)

△▼ 訃報 ▼△

今年は哀しい知らせが 2 件寄せられました。まず日本支部の会員であり、京都大学で長く教鞭をとられた山本淳一先生が、2008 年 8 月 26 日に亡くなりました。学会への永年のご貢献に感謝申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。嶋崎陽一先生がメーリングリストに一報を流し、また、本ニューズレターに追悼文を寄せてくださいました。

イギリスでは中世研究者 Derek Brewer 先生のご夫人 Elizabeth Brewer が 2008 年 9 月 17 日に永眠されました。こちらの一報は高宮利行先生がメーリングリストに流し、不破有理先生とともに追悼文をお寄せくださいました。(事務局)

山本淳一氏 (1933～2008)

京都大学名誉教授。2008 年 8 月 26 日、京都にて逝去された。

氏は、1956 年に京都大学文学部を卒業、58 年に同大学大学院文学研究科修士課程を修了、63 年に博士後期課程を単位修得認定退学された。63 年より京都大学文学部助手、65 年より立命館大学産業社会学部講師・助教授を経て、68 年よりは京都大学教養部助教授に就任、84 年には教授に昇任された。93 年の同学部改組の後、同大学総合人間学部教授を務め、96 年に同大学を退官して、摂南大学国際言語文化学部教授に就任、2004 年まで同職をお務めになった。

教育者としての氏は、主に初修外国語としてのフランス語教育にあたられ、京都大学教養部におけるフランス語インテンシヴ・コースの展開に主導的な役割を果たすなど、精力的かつ厳格な指導で知られた。また情報技術の発展にいち早く着目し、故大橋保夫氏らと共に 80 年代より同教養部フランス語教室の情報化を手がけられたことも忘れ難い。さらに同大学文学部・文学研究科では、長年にわたり古フランス語及び中世フランス文学をテーマとする講義を担当なさった。

研究面においては、『フランス文学講座』第 1 巻「小説 1」(大修館書店、1976 年)の 1 章「アレゴリーの文学」の執筆や、日本初の本格的なフランス語大辞典である『仏和大辞典』(白水社、1981 年)中の「フランス語の歴史」「語源解説」「発音解説」の執筆、『小学館ロベール仏和大辞典』(小学館、1988 年)の編纂、フェルナン・ブローデルの『物質文明・経済・資本主義 15-18 世紀』第 2

部「交換のはたらき」(みすず書房、1986、88 年)、ルイ・アントワーヌ・ド・ブーガンヴィルの『世界周航記』(岩波書店、1990 年)の翻訳といった、啓蒙的な著述にみられるように、文学・言語学・歴史と幅広い分野に関心を示された一方で、中世フランスにおけるアレゴリー文学を専門分野とし、特に『地獄の夢』や『メロージス・ドゥ・ポルレグ』の作者であるラウル・ドゥ・ウーダンを主たる研究対象とされていた。

主な論文は以下の通り。

- 「Raoul de Houdenc, Le Songe d'Enfer の写本伝統」『フランス語・フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) 3 (1964)
- 「アレゴリー文学の伝統と Le Songe d'Enfer」『外国文学研究』(立命館大学) 12 (1966)
- 「Le Roman de Troie における La Fine amor」『人文』(京都大学教養部) 19 (1973)
- 宮廷物語の変質-ラウル・ドゥ・ウーダン. 『メロージス・ドゥ・ポルレグ』『人文』(京都大学教養部) 29 (1978)
- 「中世騎士物語における城塞都市とその住民」『人文』(京都大学総合人間学部) 39,41 (1994) (嶋崎陽一)

エリザベス・ブルーア Elisabeth Brewer 氏 (1923 年 1 月 16 日 - 2008 年 9 月 17 日)

イングランド中西部スタフォードシャのバーンヒル・グリーン牧師だったバジル・フル(Basil Hoole)の娘として生まれたエリザベスは、戦前の社会でよくあったように、11 歳まで自宅で教育を受け、その後アボッツ・ブロムリーにある寄宿学校に入学した。1939 年に学校を出て、電気会社の事務所で働きながら、夜学にも通った。週末にはどんな悪天候でも、24 キロの道のりを自転車でお家に帰った。

1945 年バーミンガム大学に入学し、英文学を学んで学士号を取得したが、その間に将来の夫となる中世英文学者デレク・ブルーア(Derek Brewer)

博士と出会い、まもなく結婚した。二人がバーミンガムに住んでいる間に3人の子宝に恵まれたが、その間もエリザベスは中学校で、後には教員養成大学で教鞭をとった。1956年4月、3番目の子供が誕生した3日目に修士論文を完成させた。その3ヵ月後、ブルーア博士が国際キリスト教大学で教えるために東京に赴任、一家は緑の多いキャンパスに2年間住んだ。来日早々は異国での生活に戸惑ったエリザベスも、まもなく文化や習慣の違いを楽しむようになった。子育ての傍ら、一橋大学と東京女子大学で非常勤講師も務めた。

1958年、日本で誕生した第4子も含めて一家はバーミンガムに戻り、教員養成大学で教えた。1965年、子供が5人となった一家はケンブリッジに移り住んだ。エリザベスはブルーア博士の教え子たちの面倒を見ながら、ホマトン・コレッジ (Homerton College) の常勤講師となった。そこでは1988年に引退するまで教え続けた。

この間1977年から1990年まで、ブルーア博士はエマニュエル・コレッジ (Emmanuel College) のマスターという要職にあったが、エリザベスは夫を助けて献身的に学生、職員、他のコレッジに所属する大学院生の面倒をみてきた。

エリザベスは、夫に尽くし、5人の子供たちを育て上げ、また大学で英文学を講じただけではない。研究者としては、チャーサーの物語への注釈本から始まって、『サー・ガウエインと緑の騎士』の典拠作品に関する著作、1800年以降のアーサー王伝説についての研究書、T. H. ホワイトの浩瀚な伝記などを出版した。1990年にブルーア博士がマスター職を退任すると、二人はヒルズ・ロードの旧居に戻った。

ICUでの講義、慶應義塾大学名誉博士、日本学士院名誉会員など、ブルーア博士と日本との関係はきわめて長い。その結果、バーミンガムやケンブリッジに留学するわが国の中世英文学研究者がブルーア夫妻にお世話になる機会が多かった。

夫人は常に控えめながら、日本人の訪問者の面倒をよく見てくださった。

エリザベス・ブルーアの葬儀は2008年9月25日に執り行われた。合掌。 (高宮 利行)

* * *

エリザベス・ブルーア夫人が亡くなった、との報を高宮利行先生から伺った折には言葉を失った。最近ではむしろ Derek Brewer 教授のご体調を心配していただけに、奥様が先立たれるとは予想もしていなかった。デレック・ブルーア先生が中世研究の大家として聳え立ってらっしゃるだけに、奥様はいつも「ブルーア夫人」として記憶されている。しかし私にとってはブルーアの名前はエリザベスあつてのブルーアである。私事で恐縮だが、旧文部省の派遣留学生としてケンブリッジ大学のホマトン・コレッジに留学した。初めての英国である。その折に指導教授としてお世話になったのがブルーア先生だった。その頃まだケンブリッジでは New Criticism の影響か、与えられた教材をその場で批評し合う学部生向けの授業があり、その担当がブルーア先生であった。先生が明るい陽が差しこむ部屋で「はい、これがユーリの分よ」と、にこやかに教材を手渡された優雅な容姿が忘れられない。時には真っ赤なセーターに真っ赤なストッキングをおしゃれに組み合わせ着てらしたお姿が目につく。思い出してみると、軽やかに心持ちステップを踏むような足取りで歩いてらっしゃる姿を私はいつも追いかけていた気がする。留学最後の学期で Sir Thomas Malory の魅力に出会い、アーサー王研究に進むきっかけを与えてくださったのもブルーア先生だった。再度留学した折に研究の方向に迷っていた私に「モードレッドがおもしろいのではないかしら」と力づけてくださったのもブルーア先生だった。先生からいただいた論題への十分な成果をご報告できる前に大切な恩師をなくしてしまった。

家庭にあつては5人のお子さまを育て、大学にあつてはいつも誠実に学生の目を覗き込むようにお話しなさる暖かい先生であつた。ケンブリッジのお宅に伺つた際にデレック・ブルーワー教授が傍らに微笑んで立つブルーワー先生を評しておっしゃつた言葉が忘れられない。“You know, she cooks, she teaches, and she writes books.” ほんとうに女性研究者の憧れの存在であつた。心から哀悼の意を表したい。

Elisabeth Brewer 先生の著書

Studying Chaucer (1984 (1987 [printing])
The Return of King Arthur: British and American Arthurian Literature Since 1800 (Arthurian Studies 9) with Beverly Taylor (1983). *Sir Gawain and the Green Knight: Sources and Analogues* (Arthurian Studies 27) (2nd ed., 1992). *T.H. White's the Once and Future King* (Arthurian Studies 30) (1993). (不破 有理)

■□ 文献情報 □■

○● 独文 ●○

(書誌担当: 横山由広)

<研究(雑誌・論文集等)>

Aida, Motoko (會田素子): Der Schwanritter als Elementargeist - Unter Berücksichtigung von Heinrich Heines Darlegungen in „Elementargeister“ -. 慶應義塾大学独文学研究室『研究年報』25号(2008年3月) 30-53頁.

會田素子 ルードルフ・フォン・エムス著 平尾浩三訳・編『善人ゲールハルト 王侯・騎士たち・市民たち』書評 日本独文学会『ドイツ文学』136号(2008年3月) 201-203頁.

土肥由美 ダニエルの剣 - シュトリッカーの描く十三世紀の騎士奉公 中央大学人文科学研究所編『続 剣と愛と』(中央大学出版部 2006年11月) 219-264頁.

浜野明大 初期中高ドイツ語版『創世記』のミルシュテット写本の改作技法 - 詩行四六三から一〇五〇までの「墮罪」のテキスト分析 - 上智大学ドイツ文学会『上智大学ドイツ文学論集』44号(2007年) 3-37頁.

浜野明大 初期中高ドイツ語における押韻技法の一例 - 『創世記』におけるウィーン写本とミルシュテット写本の比較から - 日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』75号(2008年3月) 105-121頁.

Ishikawa, Eisaku (石川栄作): Kriemhilds Falkentraum im Nibelungenlied und Giō -Elegie in der Heike-Geschichte. 徳島大学総合科学部『言語文化研究』14巻(2006年12月) 17-30頁.

岩井方男 『ニーベルンゲンの歌』と伝承(3) 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会『教養諸学研究』123号(2007年) 1-16頁.

岩波敦子 「こころ」をめぐる言説 『創文』505号(2008年1月) 28-31頁.

香田芳樹 紫式部とメヒティルト 『創文』505号(2008年1月) 40-44頁.

長縄寛 英雄叙事詩『クードルーン』に見られる定関係代名詞構文について 京都ドイツ語学研究会『Sprachwissenschaft Kyoto』7号(2008年5月) 1-18頁.

野内清香・石川栄作 『ティードレクス・サガ』におけるグリームヒルトの復讐 徳島大学総

合科学部『言語文化研究』13巻(2005年12月)19-58頁.

鴻森大介 叙事詩の視覚的表現と受容について—『ニーベルングンの歌』を中心に— 日本口承文芸学会『口承文芸研究』29号(2006年3月)17-27頁.

須澤通・浜泰子 Mechthild のミンネにおける visio と gustus—中世宮廷文学におけるミンネとの比較研究— 信州大学人文学部『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』42号(2008年3月)1-14頁.

鈴木桂子 ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの幻視における視点の問題について 中央大学人文科学研究所『人文研紀要』52号(2004年)63-86頁.

鈴木桂子 日本の絵画とヒルデガルト・フォン・ビンゲンの幻視—比較文化研究がもたらすもの— 中央大学人文科学研究所『人文研紀要』56号(2006年)175-204頁.

武市修 『イーヴァイン』における名詞 *mære* の用法—押韻技法の観点から— 関西大学独逸文学会『独逸文学』52号(2008年3月)23-49頁.

寺田龍男 軍記物語と英雄叙事詩(4)—享受史の一側面— 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院『メディア・コミュニケーション研究』54号(2008年)1-17頁.

渡邊徳明 ハインリヒ・フォン・テム・テュールリン(Heinrich von dem Türlin)の『王冠』(*Diu Crône*)について *The Round Table* (慶應義塾大学高宮研究会編)22号(2008年)110-124頁.

吉田量彦 聖杯探求と倫理的自己形成—『パルツィファル』への覚え書き— 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会『慶應義塾大学日吉紀要人文科学』22号(2007年5月)127-148頁.

◆◇ 仏文 ◇◆

(書誌担当: 嶋崎陽一)

<研究(単行本)>

水野尚『恋愛の誕生—12世紀フランス文学散歩』(京都大学学術出版会、2006年)257頁

<研究(雑誌・論文集等)>

天沢退二郎「物語を問う物語—ファンタジーと現実の関わりをめぐる」『ユリイカ』(東京、青土社)39-6(2007年6月)93-97

福本直之「Rutebeuf, Renart le Bestourne(1)」『一般教育部論集』(創価大学総合文化部)30(2006年2月)49-56

福本直之「Le Couronnement de Renart(1)」『一般教育部論集』(創価大学総合文化部)30(2006年2月)57-101

福本直之「古字小露地筌蹄—西洋中世古写本学事始」『一般教育部論集』(創価大学総合文化部)30(2006年2月)103-143, 図巻末 32p

福本直之「Rutebeuf, Renart le Bestourne (2)」『一般教育部論集』(創価大学総合文化部)31(2007年2月)81-102

福本直之「Renart le Nouvel (1)」『一般教育部論集』(創価大学総合文化部)31(2007年2月)103-173

福本直之「Autour de Renart... (1) «Le Dit de la queue de Renart»」『一般教育部論集』(創価大学総合文化部)32(2008年2月)69-75

- 福本直之「Sur «une branche de Renart» par Philippe de Novare」『一般教育部論集』(創価大学総合文化部) 32 (2008年2月) 77-99
- 花田文男「遺体が血を流して殺害者を告発した話」『千葉商大紀要』(千葉商科大学) 42-3 (2004年12月) 17-38
- 原野昇「文学ジャンルと言語」『大会 proceedings』(日本英文学会) 78 (2006年3月) 143-145
- 林亮「中世盛期フランス王領地における騎士身分の形成—国王役人編成の検討を中心に」『史叢』(日本大学史学会) 78 (2008年3月) 198-178
- 市橋明典『『不可能なもの』にみられる「聖杯探求—ジョルジュ・バタイユの「ポエジー」について』『仏語仏文学研究』(東京大学仏語仏文学研究会) 30 (2005年) 97-117
- 池上俊一「歴史家の誕生 ジュール・ミシュレ『フランス史』を読む(新連載・1)「中世」の子、ミシュレ」『UP』(東京大学出版会) 428 (2008年6月) 8-13
- 伊藤了子「Le Roman de Tristan en prose における amer と tant」『人文論究』(関西学院大学人文学会) 57-3 (2007年12月) 82-99
- 片山幹生「中世の演劇的テキストへの言語学的アプローチ」『早稲田フランス語フランス文学論集』(早稲田大学文学部フランス文学研究室) 15 (2008年3月) 66-80
- 松原秀一「演説館 書物の敵:図書館」『三田評論』(慶応義塾) 1084 (2005年11月) 44-47
- MENARD, Philippe, “Les Innovations du Roman de Tristan en prose,” in Symposium et Conférence Internationaux. Le XLe Anniversaire de la Fondation de l’Université Meisei, éd. Shigemi SASAKI. Tokyo: Université Meisei, 2006, pp. 69–88
- 根津由喜夫「アーサー王宮廷のビザンツ騎士:クレチアン・ド・トロワ『クリジェス』雑考」『金沢大学文学部論集. 史学・考古学・地理学篇』(金沢大学) 25 (2005年3月) 1-38
- 小川直之『『ギョーム・ド・ティール年代記続篇』の未発表断片写本について』『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) 92 (2008年3月) 155-168
- 大西麻衣子『『散文ランスロ』における「フラッシュ・バック」について』『早稲田フランス語フランス文学論集』(早稲田大学文学部フランス文学研究室) 14 (2007年3月) 34-46
- 岡崎敦「中世フランスの文書と古文書学(世界史の研究(214))」『歴史と地理』(東京、山川出版社) 611 (2008年2月) 25-32
- 小澤祥子「中世ファルスの「性欲への笑い」とキリスト教社会」『仏語仏文学』(関西大学フランス語フランス文学会) 34 (2008年) 223-244
- 小澤祥子「中世ファルスにおけるキリスト教」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) 91 (2007年9月) 190
- 佐佐木茂美『『散文トリスタン物語』内の記述と発話行為の問題(tome IX, §1-§45)』『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) 90 (2007年3月) 200
- 佐佐木茂美「ある彫像の運命」考—十三世紀の幾つかの証言から—『神話・象徴・文化』篠田知和機基編, 第3巻(名古屋:楽瑯書院, 2007) 111-124

- 佐佐木茂美「トリスタンとイゾー, その「相对死」と末裔・始祖- 中世後期のテキスト『悲しみのイザイ』から」『神話・象徴・言語』篠田知和機基編(名古屋: 楽瑯書院, 2008) 145-166
- 佐佐木茂美編『明星大学創立四十周年記念国際シンポジウムおよび国際学術講演会』(明星大学, 2006)
- 佐佐木茂美「『散文トリスタン物語』における独創性」(フィリップ・メナール氏講演の資料・報告) 89-93
- Menard, Phillipe, 'MARCO POLO et le Japon' (講演) 39-62
- 横山安由美「マルコ・ポーロ資料」(上記講演の資料報告) 63-64
- SASAKI, Shigemi, 'La "Kaiiere d'or" de Galaad dans le *Roman de Tristan en Prose*, "Contez me tout", Mélanges de Langue et de Littérature médiévales offerts à Herman Braet (Louvain-Paris-Dudley: Peeters, 2006) 297-305
- 清水康子「フランス文学における舞踊(I): 中世からルネサンスへ」『研究紀要』(国立音楽大学) 41 (2006年) 131-142
- 篠田知和基「世界神話の視点から」『アジア遊学』(東京、勉誠出版) 100 (2007年7月) 100-103
- 高名康文「『狐物語』とクレチアン・ド・トロワの物語における喪の嘆き: クレチアンの物語における服喪の様子の描写について」『福岡大学人文論叢』(福岡大学) 39-4 (2008年3月) 1081-1121
- UESUGI, Kyoko, «Essai d'une interpretation sur le v. 1454 et le v. 1462 dans Tristan de Thomas : principalement sur l'expression "vostre amour"», *Etudes de Langue et Littérature Françaises (Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises)*, 90 (mars 2007) 20-35.
- 横山安由美「『聖杯由来の物語』における聖顔布の表象可能性」『国際交流研究』(フェリス学院大学国際交流学部紀要委員会) 10 (2008年3月) 65-77
- 渡邊浩司「『名無しの美丈夫』と『ヴィーガーロイス』-2つの世界」『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所) 56 (2006年) 109-149
- 渡邊浩司「クマをめぐる神話・伝承-アーサー王伝承を例に-」天野哲也・増田隆一・間野勉編『ヒグマ学入門-自然史・文化・現代社会』(北海道大学出版会、2006年10月) 161-172
- 渡邊浩司「ペルスヴァルに授けられた剣と刀鍛冶トレビュシェットの謎」『続・剣と愛と 中世ロマニアの文学』(中央大学人文科学研究所、2006年11月) 169-217
- 渡邊浩司「「伝記物語」の変容(その2)『グリグロワ』をめぐる」『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所) 59 (2007年) 47-80
- 渡邊浩司「13世紀フランスの「ゴーヴァン礼賛」-『危険な墓地』をめぐる」『伝語伝文学研究』(中央大学伝語伝文学研究会) 40 (2008年3月) 37-83
- 渡邊浩司「クレチアン・ド・トロワ『聖杯の物語』におけるトレビュシェットの謎-「続編」群およびヴェーレント伝説との比較から-」『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所) 62 (2008年8月) 233-272

<翻訳>

Langlais, Xavier de ラングレ、グザビエ・ド (飯田達夫訳) 『アーサー王の物語』 (東京: 油彩画技術修復研究所、2007年11月) 240頁

Gracq, Julien グラック、ジュリアン (天沢退二郎訳) 『『漁夫王』—全四幕のうち第四幕』 『現代詩手帖』 (東京、思潮社) 51-5 (2008年5月) 106-114

Walter, Philippe ワルテル、フィリップ (篠田知和基訳) 「さまよえる魂の住まう山—ゲルヴァシウスからドーデまで」 『アジア遊学』 (東京、勉誠出版) 101 (2007年7月) 146-153

<書評>

堀越宏一 「アラン・サン＝ドニ著/福本直之訳、『聖ルイの世紀』, 文庫クセジュ』 『史学雑誌』 (財団法人史学会) 115 (2006年8月) 1468-1469

森野聡子 「書評 渡邊浩司著『クレチアン・ド・トロワ研究序説 修辞学的研究から神話学的研究へ』 『エール』 (日本アイルランド協会学術研究部) 23 (2003年12月) 114-116

▽▼ 英文 ▼▼

(書誌担当: 辺見葉子、協力: 徳永聡子)

<研究 (単行本) >

井村君江 『Fairy Book 井村君江の妖精図鑑』, 川口正彦(イラスト), なんばきび(イラスト) (東京: レベル, 2008), 79pp

井村君江 『妖精学大全』 (東京: 東京書籍, 2008), 477pp

井村君江 『妖精美術館』 (東京: レベル, 2007), 119pp

中尾佳行・小野祥子・白井菜穂子・野地薫・菅野正彦編 『テキストの言語と読み—池上恵子教授記念論文集』 (東京: 英宝社, 2007), 512pp

Nakao, Yuji, *Philological and Textual Studies of Sir Thomas Malory's Arthurian* (Tokyo: Eihosha, 2008), xvii, 312 pp

多ヶ谷有子 『王と英雄の剣: アーサー王・ベオウルフ・ヤマトタケル—古代中世文学にみる勲と志』 関東学院大学人文科学研究研究所研究選書 29 (東京: 北星堂書店, 2008), 267pp

<研究 (雑誌・論文集等) >

土肥由美 「Corpus Christi—イエス・キリストの身体的実存をめぐる典礼の演劇性と英国中世劇—」 『テキストの言語と読み—池上恵子教授記念論文集』 中尾佳行・小野祥子・白井菜穂子・野地薫・菅野正彦編 (東京: 英宝社, 2007), pp. 342-57

不破有理 「紅いドラゴンの行方—ウェールズ伝承およびアーサー王年代記におけるドラゴンの表象」 『慶応義塾大学日吉紀要, 英語英米文学』 (2008), 1-24

Haruta, Setsuko, "What with his wysdom and his chivalrie": Political Theseus in Chaucer's *Knight's Tale*, *Studies in Medieval English Language and Literature*, 22 (2007), 1-12

辺見葉子 「妖精に襲われた王国」 『ユートピアの文学世界』 (東京: 慶應義塾大学出版会, 2008), pp. 159-80

辺見葉子 「『指輪物語』における「死」の心象風景—墳墓・船葬・塚人 (万葉古代学研究所第 2

- 回主宰共同研究報告)『万葉古代学研究所年報』(2008), 239-51
- 池上忠弘「4人の人間関係と知恵比べ—チャーサーの『粉屋の話』を巡って—」『テキストの言語と読み—池上恵子教授記念論文集』中尾佳行・小野祥子・白井菜穂子・野地薫・菅野正彦編(東京:英宝社,2007), pp. 283-94
- 伊藤盡「北欧神話の世界とその受容」『ユリイカ』(特集 北欧神話の世界), 39 (2007), 187-98
- 伊藤盡「北欧神話の神々事典」『ユリイカ』(特集 北欧神話の世界), 39 (2007), 214-20
- Ito, Tsukusu, 'Considering the Differences of Scandinavian Tradition in Danelaw: Stone Sculpture in Cumbria and Other Danelaw Areas', *The Round Table* (慶應義塾大学高宮研究会編), 22 (2008), 45-59
- 井辻朱美, 伊藤盡「散種される北欧神話—音楽・言葉・イメージを渉猟する」『ユリイカ』(特集 北欧神話の世界), 39 (2007), 58-75
- Kawasaki, Masatoshi, "“whoo did hem wirche”: “books” and “experience” in Chaucer's House of Fame', in 『テキストの言語と読み—池上恵子教授記念論文集』中尾佳行・小野祥子・白井菜穂子・野地薫・菅野正彦編(東京:英宝社,2007), pp. 236-47
- Kikuchi, Kiyooki, 'What the Style of The Owl and the Nightingale Tells Us: Colloquialism, Language of Law and Dynamics of Aural Literature', in 『テキストの言語と読み—池上恵子教授記念論文集』中尾佳行・小野祥子・白井菜穂子・野地薫・菅野正彦編(東京:英宝社,2007), pp. 194-208
- Komiya, Makiko, 'The Transition of the Round Table: Shape and Significance', *Studies in Medieval English Language and Literature*, 22 (2007), 13-25
- 松田隆美「中世学者としての西脇順三郎」『英語青年』(特集 西脇順三郎), 153 (2008), 602-05
- Matsuda, Takami, 'Sir Gawain and the Green Knight and St Patrick's Purgatory', *English Studies*, 88.5 (2007), 497-505
- 向井毅「写本アンソロジーから Sammelband へ: 「作品集」誕生への胎動を観察する」『文芸と思想』, 71 (2007), 37-50
- 向井毅「W.コップランド版(1557年)『アーサー王の死』の謎—タイトル・ページを探る—」『テキストの言語と読み—池上恵子教授記念論文集』中尾佳行・小野祥子・白井菜穂子・野地薫・菅野正彦編(東京:英宝社,2007), pp. 398-414
- 小路邦子「ガウエイン—その毀誉褒貶—」*The Round Table* (慶應義塾大学高宮研究会編), 22 (2008), 85-95
- 小路邦子「王権とマロリー」『テキストの言語と読み—池上恵子教授記念論文集』中尾佳行・小野祥子・白井菜穂子・野地薫・菅野正彦編(東京:英宝社,2007), 392-97
- 高木眞佐子「研究ノート: St. Alban's *Chronicles* と Caxton 版 *Chronicles* の目次に関する報告」*The Round Table* (慶應義塾大学高宮研究会編), 22 (2008), 24-29
- 高橋勇「「礼節の騎士」の誕生—再話としての英国ガウエイン・ロマンス—」*The Round Table* (慶應義塾大学高宮研究会編), 22 (2008), 125-38

- 高宮利行「アーサー王伝説とラファエル前派—書物史の観点から」『英語青年』(特集 ラファエル前派) 154 巻 4 号 (2008.7)
- 竹中彌生「ジョン・アーデンの演劇理論 1」『駿河台大学論叢』(2008), 47-73
- 徳永聡子「慶應義塾図書館とインキュナブラ—収集、整備、公開へ」『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』, 54 (2008), 59-82
- 徳永聡子「書物に探る中世後期の女性と読書」『文読む姿の西東—描かれた読書と書物史』田村俊作編 (東京: 慶應義塾出版会, 2007), pp. 77-98
- 山口恵里子「身体を与える—F. M. ブラウンの *Take Your Son, Sir!* をめぐって」『英語青年』(特集 ラファエル前派) 154 巻 4 号 (2008.7) 210-15
- <翻訳>
- ジェフリー・オブ・モンマス「メルリーヌの予言」瀬谷幸男訳『北里大学一般教育紀要』(2007), 126-12
- ゲコスキー, リック『トールキンのガウン—稀覯本ディーラーが明かす、稀な本、稀な人々』高宮利行訳 (東京: 早川書房, 2008.4), 281pp
- McKinnel, John「原典資料」伊藤盡訳『ユリイカ』(特集 北欧神話の世界), 39 (2007), 107-20,
- Orton, Peter「異教神話と宗教」伊藤盡訳『ユリイカ』(特集 北欧神話の世界), 39 (2007), 145-62
- <その他>
- ひかわ玲子『帝国の双美姫 1』(東京: 幻冬舎, 2008), 237pp
- ひかわ玲子『氷壁に輝く双つ星』(小学館ルルル文庫 ひ1-5 クリセニアン夢語り5) (東京: 小学館, 2008) 232pp
- ひかわ玲子『遙けき黄金の都の調べ』(小学館ルルル文庫 ひ1-4 クリセニアン夢語り4) (東京: 小学館, 2008), 229pp
- ひかわ玲子『西方の夢に棲む姫君』(小学館ルルル文庫 ひ1-3 クリセニアン夢語り3) (東京: 小学館, 2007), 231pp.
- ひかわ玲子『眠れる神々の道へ』(小学館ルルル文庫 ひ1-2 クリセニアン夢語り2) (東京: 小学館, 2007), 222pp.
- ひかわ玲子『エル・デオの眠れる王に』(小学館ルルル文庫 ひ1-1 クリセニアン夢語り1) (東京: 小学館, 2007), 243pp.
- 菊池, 清明, 「21 世紀の洋書棚 中世文学の遺産とその評価—OED からマニユスクリプト・コンテキストあるいは学際性へ—Neil Cartlidge, Ed. *The Owl and the Nightingale: Text and Translation*」, 『英語青年』, 153 (2007), 489-91
- 小路邦子, 「ハリー・ポッターとアーサー王」『ふくろう通信』, 7 (2007), 46-49
- Takahashi, Isamu, 'John F. M. Dovaston's "Bookworms: How to Kill"', *Notes and Queries*, 54.2 (2007), 178-79
- 高橋, 勇, 「トマス・マロリー『アーサー王の死』スタンズビー印行(1634)」, *Medianet*, (2007), 14, 57-58
- 「慶應義塾図書館第 248 回展示 西脇順三郎没後 25 年記念 慶應義塾創立 150 年記念イベント「学者としての西脇順三郎」展」*The Round*

Table (慶應義塾大学高宮研究会編), 22 (2008), 139-56 (寄稿者(掲載順): 高宮利行、松田隆美、原島貴子、大道千穂、池田早苗、菅野磨美、高橋三和子)

◇◆ その他 ◇◆

(書誌担当: 辺見葉子、協力: 嶋崎陽一)

福井千春『わがシッドの歌』の作者をめぐって
『中央大学論集』(2008), 1-10

栗原健「紅の騎士」と勇者ワルウェイン—中世ネーデルラントの騎士道物語に見る死の風景」
『日蘭学会会誌』(日蘭学会) 54 (2006年12月) 43-53

野村竜仁「スペイン神秘思想と騎士道物語—アマデイス、ロヨラ、サンタ・テレサ・デ・ヘススを中心として」『神戸外大論叢』(神戸市外国語大学研究会) 345 (2007年9月) 37-52

浦一章「ダンテにおけるウェルギリウス受容 (Symposia 中世ヨーロッパ文学の創成と継承—VIRGIL、DANTE そして CHAUCER)」
『大会 proceedings』, 79 (2007), 170-72

浦一章「帰国後のファルサーリ—その活動のひとつの記録」『美術史論叢』(2007), 88-84

<翻訳>

オウィディウス『恋愛指南—アルス・アマトリア』
杳掛義彦訳 (岩波文庫, 2008)

<注記>昨年度の News Letter には Bulletin 掲載分の書誌情報を含めませんでしたので、本年度は2年分を載せてあります。何卒ご了承のほどお願い致します。(書誌)

△▼ 学会・講演会のお知らせ ▼△

●日本中世英語英文学会第24回全国大会
日時: 2008年12月6日(土)・7日(日)
場所: 大阪府立大学 中百舌鳥キャンパス

●「西洋中世学会」が2009年4月発足予定

1. 若手研究者のためのセミナー

日程: 2008年10月25日(土)、26日(日)、
場所: 慶應義塾大学三田キャンパス

2. 第1回西洋中世学会大会

日時 2009年6月27日(土) 14時~17時半
場所 東京大学 駒場キャンパス

※ 西洋中世学会の詳細については、以下URLをご参照ください。

<http://www.medievalstudies.jp/>

◇◆2008年度 国際アーサー王学会◆◇

◇◆日本支部大会のお知らせ◆◇

日時: 12月20日(土) 午後1時~

場所: 白百合女子大学 仙川キャンパス
2007教室

〔研究発表〕「2008年レンヌ国際大会でテーマとなった研究を中心に」(発表者調整中)

〔講演〕松原秀一 「テニソン以降——フランス中世研究への途」

大会費: 1000円 (学生無料)

〔懇親会〕18時~ Bistro de Herb

<http://www.bd-herb.com/index.html>

※京王線「仙川」駅より徒歩3分

懇親会費: 5000円

△▲△ 白百合女子大学へのアクセス △▲△

○京王線新宿駅より25分、仙川駅下車、徒歩10分。

○JR吉祥寺駅(南口、バス停7番)より20分。JR三鷹駅(南口、バス停7番)より30分。白百合女子大学入口下車。

○小田急線成城学園前駅(北口、バス停3番)より15分。

仙川駅入口にて下車、徒歩 15 分。

◆◆ 会費納入のお願い ◆◆

右記の通り 2009 年度分会費のご入金をお願いします。払込票はこのニュースレターと一緒に送っています。

<郵便振替口座番号>

加入者名: 国際アーサー王学会日本支部

口座番号: 00250-6-41865

会計: 竹中 肇子

年会費: 3000 円(* 寄附金も同じ振込用紙にてお願いします。)

○● 賛助会員および寄附金納入者報告 ●○

○● 賛助会員制度終了のお知らせ ●○

賛助会員(2007-2008 年)

天沢退二郎様

池上忠弘様

原野昇様

高津春久様

増山暁子様

高宮利行様

寄附金納入者(2007-2008 年)

福井千春様 3 口

不破有理様 1 口

池上忠弘様 4 口

原野昇様 3 口

中尾祐治様 1 口

岡三郎様 7 口

篠田勝英様 2 口

高木眞佐子様 2 口

高宮利行様 4 口

* 2007 年総会でご報告した詳細をこちらの紙面にてご報告申し上げます。なお、こちらには、2007 年度会費請求時(2006 年 10 月)~2008 年 10 月までの間にお預かりした会員

のお名前も掲載していることをお断りいたします。期間が 2 年に渡るため賛助会員と寄附金納入者がオーバーラップしている場合があります。

*** 2009 年度の会費請求時(今回)より、賛助会員制度は廃止されます。今後は一口 1000 円からの寄付金制度に一本化されます。** 会員の皆様には引き続きご協力をよろしくお断りいたします。(会計)

○● 寄附金募集のお知らせ ●○

日本支部では、一口 1000 円からの寄附金を、全ての会員より随時募集しています。納入意思のある方は、年会費払込票に「寄付〇口」とお書き添えの上年会費と一緒に納入してください。大会会場でお支払いいただいても結構です。皆様の暖かいご支援をお待ちしています。なお、今後は寄附金をお預かりした方のお名前をニュースレターで会員の皆様にご報告いたします。(会計)

◆◆ ご住所等変更報告のお願い及び掲載事項の見直し継続のお知らせ ◆◆

ご住所・お電話などに変更があった場合は、事務局まで速やかにご連絡ください。また個人情報保護法に伴う会員名簿の掲載事項の見直しも引き続き受けつけています。項目(所属・住所・電話/ファックス・メールアドレス)に掲載中止のご希望がございましたら事務局までお申し出ください(連絡先は下記を参照)。

△▼ 編集・発行 ▼△

国際アーサー王学会日本支部事務局

〒192-8508 東京都八王子市宮下町 476

杏林大学外国語学部

高木眞佐子研究室内 (D-530)

Fax: 042-550-0410

Email: takagi@kyorin-u.ac.jp

* ML リストご利用は

king-arthur@ml.hc.keio.ac.jp

(登録ご希望・アドレス変更は事務局まで)

* 学会ホームページ

http://www.ucc.nii.ac.jp/asia/